

事は黙々と実行、感謝の気持ちで精を出す。在職中に業務功労者として文部大臣表彰を受賞した。そして今日、全抑協のお手伝いができるのも大学のご恩があった事と老後の幸せに感謝し、あわせて異国の地に永遠に眠る友の冥福を祈り、私のシベリア抑留体験記を終わります。

シベリア強制抑留記

千葉県 菅谷 一雄

【執筆者の紹介】

現住所 栃木県小山市大字島田岸

兵歴 昭和十六年七月十六日 東部三十六部隊

隊

終戦時 満州滝江省チチハル 満州関東軍軍属

補充馬部隊

陸軍上等兵 チチハル 満州里を経て

入ソ

復員 昭和二十三年八月ナホトカ經由舞鶴港

復員後 大学職員管理営繕課主任

現在 退職後小山支部地区役員

(栃木県 野沢 芳夫)

私は昭和二十(一九四五)年八月十五日終戦を中国東北部(満州孫吳)で迎えました。

兵役は昭和十九年十一月二十三日陸軍通信兵として神奈川県東部七十八電信隊に入隊する。

直に関釜連絡船にて満州新京(長春)七五八〇部隊初年兵教育に入る。三カ月で一期の教育終る。四月の上旬チチハルに転勤、実働に入る。次に孫吳軍通信七五八四固定無線隊に転勤、この地が終戦までの居住地となる。

一方戦局の方は目を追って悪化しており、ここ満州は比較的平穏であった王道楽土も東の間、二十年八月九日ソ連軍の不法進入空襲有り、軍の施設爆破されるも応戦する武器もなく、さすが関東軍といえどもなす術もなく、ソ連軍の侵攻一方的であった。十五日玉音放送により終戦となる。国

境線では終戦がまちまちであったようだ。司令部前で武装解除日取り不明、早速復員できる噂が飛んだが実現しそうもなかった。朝鮮通過の帰路は混乱して危険である話、黒龍江を下りウラジオストクより帰る話題がもつばらであった。ここあたりが運命の別れ道であった。

その内に大隊編成がなされ、長岡大尉指揮下の第三大隊となる。どこへどう進むかお先真つ暗の出發。北に進む。二十年九月中旬、食糧、身の回り品持てるだけ背負い、孫呉を出發し三日目ごろ黒河に到着。ソ満国境の大河黒龍江乗船となる。船は下るか横断するか、皆がどうもおかしい、おかしいの声。着いた所が黒河の対岸ブラゴエシチエンスクらしい。もうだめだ、捕虜だとあきらめる。

苦難の道の第一歩の始まりである。收容所に着くまで農場の仕事。麦刈り、馬鈴薯掘り、生の麦をかじり馬鈴薯も生で。農場から農場へと進んで着いた所がライチハ第十九收容所。板塀と有刺鉄

線と四隅に望楼ある本格の收容所である。孫呉を出發し二十日余り、着の身着のまま厄介もの虱には苦勞しました。宿舎は半地下式二段板張りである。ここは炭坑町のように露天掘り、もはやどうしようもできません。十月下旬のシベリア、寒さも加わり始めます。早速ラボータ、仕事、仕事。

飢えと寒さ、重労働、線路際土砂の取り除き、貨車へ石炭を抱えて積込。何もしなくても動いていないと凍傷になってしまうので身を守るのも一苦勞です。ソ連は何でもノルマ（パーセント）がつき物で、最初のころは仕事の内容も分からないし、やる気もなし。作業現場に行っても東京ダモイはいっつ、次に食物の話。おはぎとぼた餅の違いの話ばかり。若者が一日も満腹感がなかった。故国へ帰るまで死んでなるかと自分を励まし、生き抜くことだ。

二十年の暮れから二十一年の春まで多くの抑留者を酷寒の凍土の荒野に不帰の客とさせたシベリアでの寒さと飢えと重労働の過酷な状況の中で強

く生き抜いた者の責務として後世に伝えるものです。

二十二年ごろと思います、作業班に対しノルマが上がらないので食事により一〇〇パーセント以上 一級食、八〇パーセント以上 二級食、以下三級食。お国柄働かざる者は食うべからず、食べ盛りの若者達の共食でした。長くは続かなかつた。作業の方は建築関係と変り、大工、佐官、石積み、レンガ積み、仕事も多様化してくる。

このころより民主化運動盛んとなる。吊し上げなど見られる様になる。作業班等組織替えが行われる様になる。年齢層により青年行動隊。私の作業、建築関係の資材運搬で収容所ではノルマも上位の方でした。風呂の方も周期的に入れるようになり着替えもでき、虱ともお別れできました。ソ連式健康診断はお尻の弾力で軍医夫人が一級二級、営外作業、三級軽作業を決める。

ソ連の農業生産組織にはソフホーズ(国营)、コルホーズ(法人)の二つある。二十四年ごろより

ソ連式労働賃金、その量と質により支給される様になり。二十四年五月ライチハよりハバロフスクに転属、主として農作業、八月下旬ダモイの案内あり。

ナホトカ九月一日乗船、恵山丸。九月四日、五年ぶり懐かしの故郷へ入国の手続きが終わり、五日我が家へ。

過去六十年前にさかのぼり記憶をたどりながら筆を取るわけで年月日の誤差はあるうかと思います。

戦後生まれ世代が七割を超え、戦争に対する意識が薄れ、シベリア抑留者の労苦を終らせずに子々孫々に語り継いでいきたいものです。

【執筆者の紹介】

現住所 千葉県香取郡小見川町久保

生年月日 大正十三年十二月二十日

学歴等 良文尋常高等小学校卒、農業

兵歴 昭和十九年十一月二十三日 神奈川

東部七八電信隊入隊

満州新京七五八〇部隊初年兵教育

入
ソ
昭和二十年九月 ブラゴエチエンス

ク

昭和二十年十月 ライチハー

復
員
昭和二十四年九月四日

復員後の役職

青年団長 区長 消防団長 農村下水道組合長

土地改良役員 神社総代 実行組合長 抑留者協

会役員 農業委員

(千葉県 兼平 正二)

北支より地獄のシベリア抑留記

千葉県 堀越 宗悦

昭和十九（一九四四）年十二月十日繰上げ検査で現役兵として、柏の東部八十三部隊へ入隊する。当時は静岡県の大地震で東海道線は不通で中央線で先発し博多で一泊し、映画・亀山公園の見学等で最後の一日を楽しんだ。後発隊と合流し、米潜水艦の出没する日本海博多港より夜陰に乗り駆逐艦の護衛で出航した。十二月の玄界灘は大陸から吹き付ける強風で波が荒いと聞いていたが折悪しく天候が急変、雹が甲板を叩く。三千トン級の船は木の葉のごとく大揺れ。船首が上った時は良いが、逆に船首が下った時はスクリュウの空回転でこのまま海中に沈んでしまうのかと同年兵は皆備え付けの洗面器を抱えっぱなし。もう口や腹から出る物は何も無い。早朝釜山港は波も静まり全員上陸、元気を取り戻す。列車は朝鮮半島を縦断、